きこえ・ことば

2026 年 2 月
小学部自立活動担当

保護者のみなさま、いつも自立活動の宿題のチェックや、お子さんとの取り組みなど、ご協力くださりありがとうございます。3学期の「きこえ・ことば」をお届けします。お子さんと一緒に読みながら話し合っていただければありがたいです。

きこえの環境調整は協働作業
近づいて 目線を合わせて 大きめの声で

朝、市川駅構内でスクールバスを待っている間、私たちは雑音に囲まれていることを実感します。特に電車がプラットホームに着くときやホームを通過するときには、ホームから離れたところにいても、７０dB を超える雑音を聞き続けることになります。（松戸方面や国府台方面の子どもたちも同じような経験をしているのだろうと想像します。）また、下校指導の際、真間山下のバス停でバスを待っているときにも、雑音の大きさを痛感します。このような雑音の大きい環境では、補聴器や人工内耳での音声の聴き取りが難しくなります。そこで大切になってくるのが、聞き手である子どもと話し手である大人の協働作業です。具体的には、話し手である大人が、子どもたちに近づき、目線を合わせたり、大きめの声で表情豊かに話したり、身振りやサインをつけて話したりして、子どもがより音声情報を確実に楽に聴き取れるように配慮します。学校の中では、このようなきこえに配慮した生活を送っていますが、年齢とともに経験を積み重ねると、学校以外の場での活動（例えば習い事や地域の活動など）をお子さんだけで体験することも増えてくると思います。このような場面でも、補聴機器を装用している子どもたちと周りの大人たちとの協働作業が大切になってきます。新しい習い事を始めたり地域の活動に参加したりする場合、周囲の大人の方々や、お子さんと直接かかわる子どもたちに、お子さんのきこえについて説明し理解してもらうときの参考になれば幸いです。

つかうほど増えてゆくものとは・・・

歌人 俵 万智さんが昨年出版され、ベストセラーにもなった「生きる言葉」（新潮新書）には、ご自身の子育ての経験から詠まれた次の歌が載っています。

「つかうほど増えてゆくもの　かけるほど子が育つもの　それは言葉」

この歌に出会った瞬間、ことばには言い表せないような感動を覚え、何度も何度も心の中で反芻しました。そして、目の前の子どもたちに対し、これまで以上に、毎日一言でも多くことばをかけることを自分に課していく決意をしました。

「生きる言葉」には、次の文章が続きます。

「お金や時間やモノは使えば減ってしまう。でも言葉は、興味を持って使っているうちに、芋づる式に増えてゆくのだ。**ドラ探し**やなぞなぞやしりとりも、その可愛らしい例だろう。」

注：**ドラ探し**・・・「ドラえもん」の「ドラ」から、俵さんがお子さんと「ドラ」のつくことば集めをしたということが、この文章の前に書かれています。（ドライクリーニング、ドラッグストアなど）

私自身も、日本語の面白さや魅力を子どもたちに伝えたいと思いながら、授業を行っています。例えば低学年の授業では、「日づけ」の読み方の学習の発展として、「1 月と言えば・・・」「2月と言えば・・・」とそれぞれの月の行事を思い浮かべながら、子どもたちと月々のことばを考える場面を作りました。また、高学年の授業では、かけ算九九のだじゃれで構成された詩を紹介し、子どもたちにも、かけ算九九のだじゃれを考える場を作りました。どちらも家庭学習の課題にしたので、お子さんと一緒に考えてくださった保護者の方々もいらっしゃいました。

この歌の紹介は、次のように締めくくられています。

「子どもを植物にたとえるなら、言葉は光であり水である。かけるほど吸収され、栄養になっていくというのが実感だった。さらに成長した時には、かけてやる言葉の質も問われるだろう。肥料のようなものなのかもしれない。子どもが、少しでもいい方向に伸びるような言葉をかけてやりたいなと思う。」

このように、お子さんのわかることば、使えることばを、ときにはゲーム感覚で、ときには光や水や肥料となって増やしていけるよう、お子さんと一緒に「ことば貯金」を始めませんか。

出典：「生きる言葉」 俵 万智著 新潮新書 2025 年